

## 台湾伝道の黎明

## 台湾伝道の黎明

明治 28 (1895) 年に清国から日本に割譲された台湾は、日本の初めての植民地となったことで、日本内地から台湾へ渡る人々が増加していくこととなった。このような人々の移動に伴って、台湾における伝道も始められることになる。この台湾伝道の黎明において、いくつかの事例を紹介しながら、当時の伝道方法について考えてみたい。

海外伝道の進め方については、組織的伝道と個人的伝道に大きく分けることができる。組織的伝道とは、大教会や比較的規模の大きな教会が、計画を立てながら、複数の布教師を派遣したり、経済的支援をして伝道を進める方法である。この場合、現地での伝道方法に関する知識や情報が共有されたり、伝道を進めるにあたって役割を分担するなどによって効率的に伝道が展開されることが見込まれる。これに対して、個人的伝道は、基本的には布教師が個人や家族だけで伝道を進める方法である。この場合、経済的基盤の脆弱性から、生計を立てるといふ問題に直面しながら地道な伝道を一步一步進めることとなる。この組織的伝道と個人的伝道は実際には必ずしもはっきりと区分できるわけではないが、それぞれの教会による伝道方法や発展する形を特徴づけるものとなる。

## 組織的伝道

組織的伝道として代表的なものに、山名大教会による伝道があげられる。初代会長諸井国三郎が率いたもので、本稿ではこれまで『おさしづ』における海外伝道において取り上げてきた。この組織的伝道が計画された背景には、当時の山名大教会を取り巻く状況があった。山名大教会は明治 26 (1893) 年から東北地方への布教を展開し、明治 28 (1895) 年までに 27ヶ所の教会を設立するという目覚ましい発展を見せていた。しかし、日清戦争後の深刻な不況と明治 29 (1896) 年 6 月の三陸津波、さらに凶作にも見舞われた。これに追い打ちをかけるように同年 4 月には内務省によっていわゆる「秘密訓令」が發布され、天理教への厳しい取り締まりが進められることとなり、山名大教会の布教の最前線として発展していた東北地方での布教活動が一気に停滞することとなった。

このような状況に直面した諸井国三郎は、日本の新しい領土となった台湾での布教に希望をかけた。天理教の教えがまだ伝えられていない台湾なら、天理教を伝え多くの信者を獲得することができ、さらにそのことが東北での布教の停滞という困難に込められた親神の神意であると悟ったのであろう。そこで、まず布教活動を展開するための資金を集めることとなり、山名大教会の婦人が中心となって「大日本神道天理山名婦人協会」を創立し、この会員から毎年会費として出金してもらい、布教を展開するための長期的で安定的な経済基盤を作ることとなった。ちょうどこの時期に、台湾で殖産、土木事業を展開したいという人が 3 人現れ、この人たちの台湾での人脈を利用して布教を展開することも一つの方法だと考え、布教と殖産と土木事

業の三つを成り立たせることから「鼎立社」という株式会社のようなものを設立し、集めた資金を出資金として活用することとした。明治 30 (1897) 年、先遣隊として一條源次郎ほか 2 人が台中で仮住まいとして台湾人の家屋を借り受け準備を整えて、諸井国三郎はじめ 6 人を台湾北部の基隆港で出迎えた。そこから諸井国三郎だけは台北へ向かい、当時の民政長官水野遵を総督府にたずね、天理教の布教と殖産興業の了解を求めた。さらに台北から台中へ向かう途中、新竹県で下車し、桜井勉知事をたずね、同様の了解を求め、試作地の無料借用の内諾を得た。同年 11 月には工業部、殖産部、煙草事業からなる「鼎立社」の看板を掲げた事務所が完成し、5 反 (1,500 坪) の土地を無料借地して、杉、松、檜、桜などを植林した。また煙草の栽培にも着手した。しかし、請負業は信用を得るに至ったものの、殖産興業は思い通りに進まず、特に煙草栽培事業は大きな損失を出し、当初事業を持ち掛けてきた 3 人は事業に見切りをつけて内地へ帰ってしまった。諸井国三郎は、この 3 つの事業を引き受けなければならなくなり、植林に力を入れたが、成果は芳しくなく、現地の風土病であるマラリアにかかる者も出て、資金難に陥り、事業は困難な状況となった。

さて、天理教の布教活動について見れば、諸井国三郎も現地の実情を見聞し、信者はいなくとも、先にその信仰の目標や信者が集まることが建物が必要であると感じていた。明治 30 (1897) 年 9 月 12 日におさしづを伺い、教会設立のお許しを得た。そこで、諸井国三郎は一條源次郎に台中布教専務を命じ、翌年 4 月に地方庁の認可を受け、5 月 7 日に鎮座祭を行い、台中教会を設立することとなった。これを機に鼎立社は解散し、一條たちは台中付近の台湾人の村々を巡り布教に奔走した。彼とともに布教していた高室清助は台北布教へ向かい、新しく渡台した松原織蔵は新竹での布教を命じられた。このあと、明治 33 (1900) 年 6 月に高室清助を担任とした台北教会を設立、明治 37 (1904) 年 7 月に守屋武治を担任とした台南布教所の設置につながっていく。高室清助は明治 30 (1897) 年 9 月に渡台し、諸井国三郎の指導の下、各地で奔走していた。また、守屋武治は明治 31 (1898) 年 7 月に渡台し、台中、台北で布教に従事した後、明治 36 (1903) 年から台南において布教を始めていた。

このように黎明期における山名大教会の組織的伝道は、当初の殖産事業は頓挫したものの、大教会長が率いて布教展開することで人材面でも資金面でも、個人的布教とは比較にならないほど条件が恵まれていた。そのおかげで、台湾で初めての教会を設立しただけでなく、その教会を布教活動の拠点としながら、各地へ布教師を派遣することもできた。そして、次第に広範囲にわたって布教を展開することで、台湾における天理教伝道の礎を築くこととなったのである。

## [参考文献]

高野友治『天理教伝道史』10、天理道友社、1975 年。